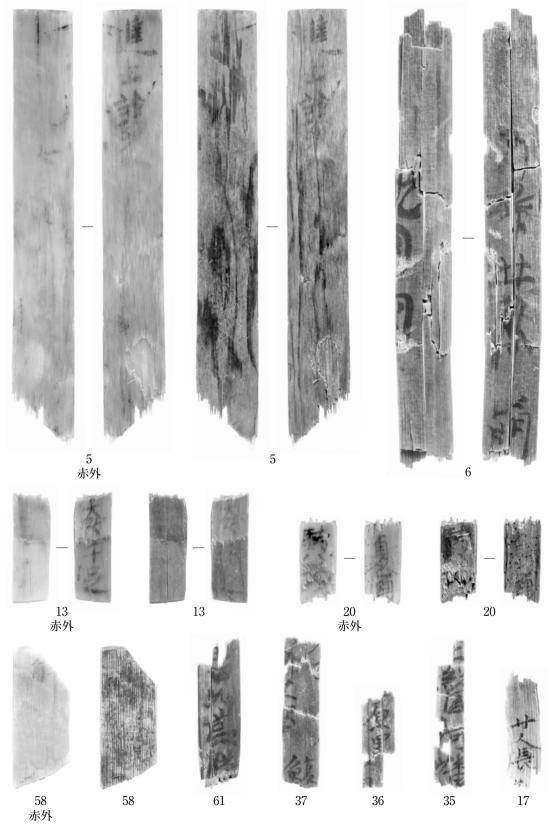
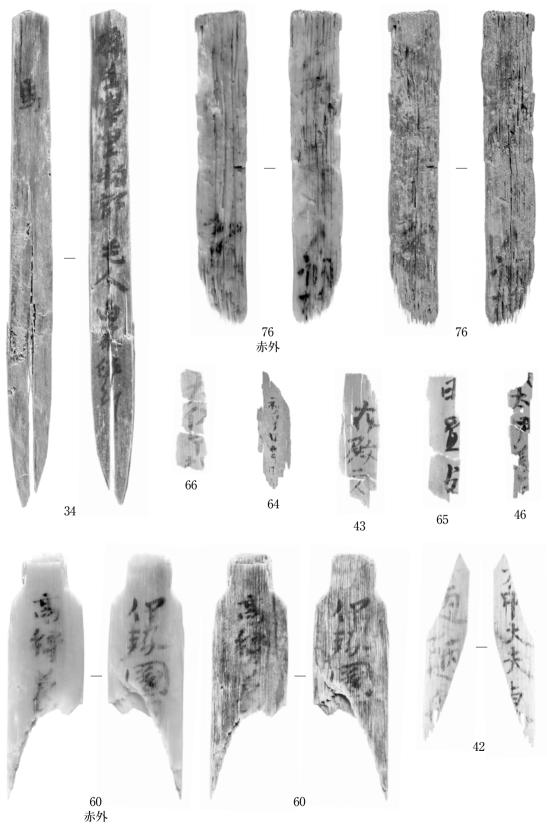
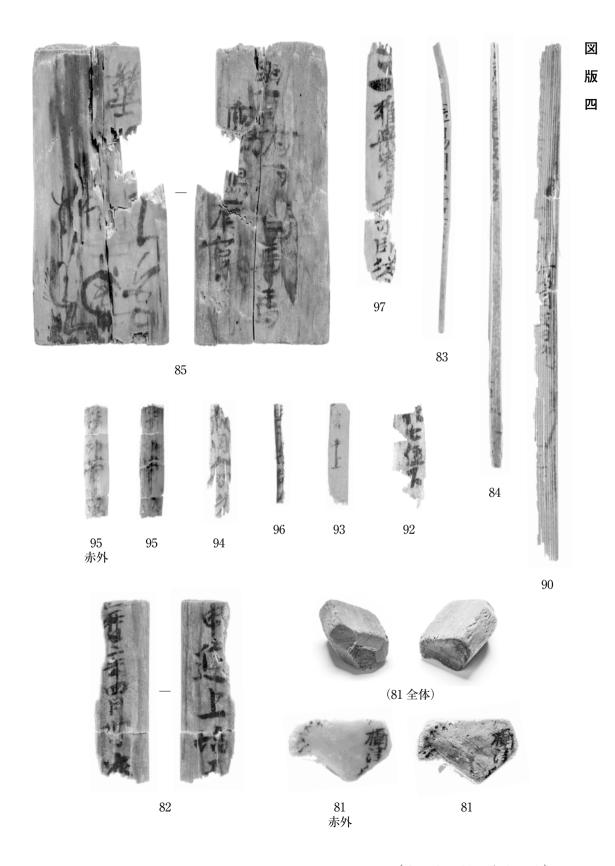
#### 平 城 宮発 掘 調 査 出 土木 簡 概 報

奈良文化財研究所

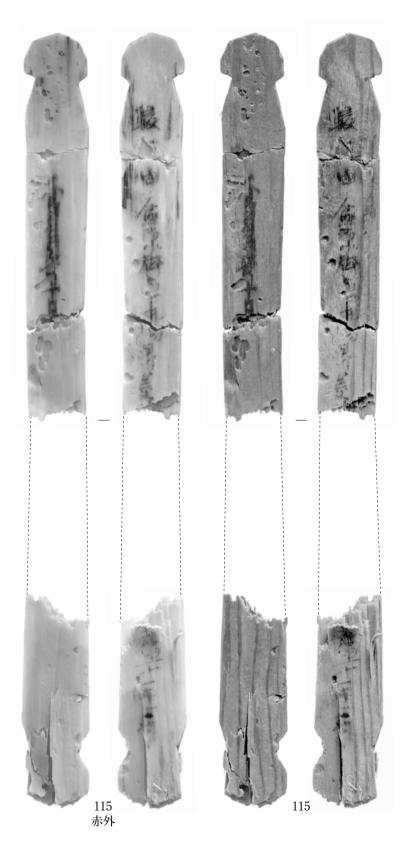


図版三



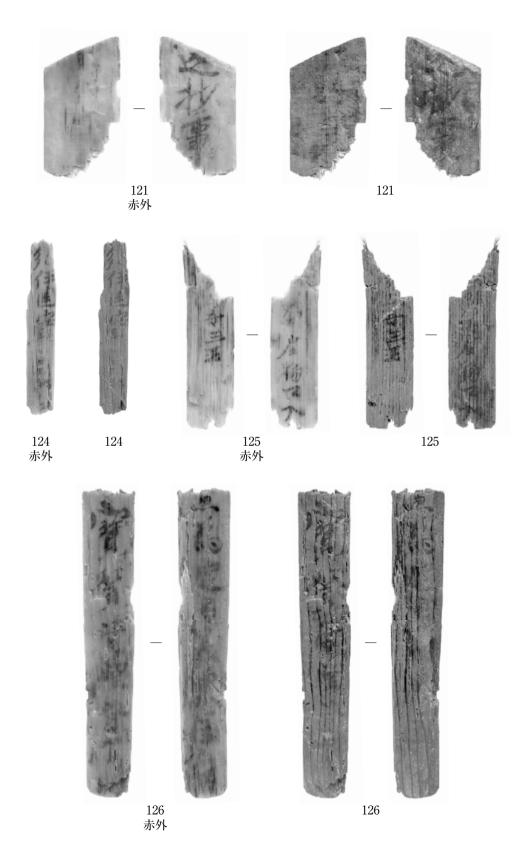


(2:3,81のみ1:1)

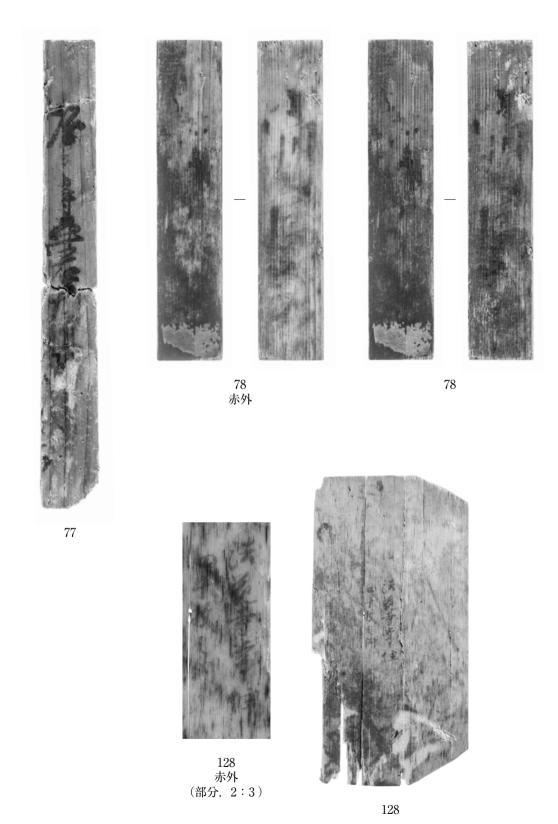


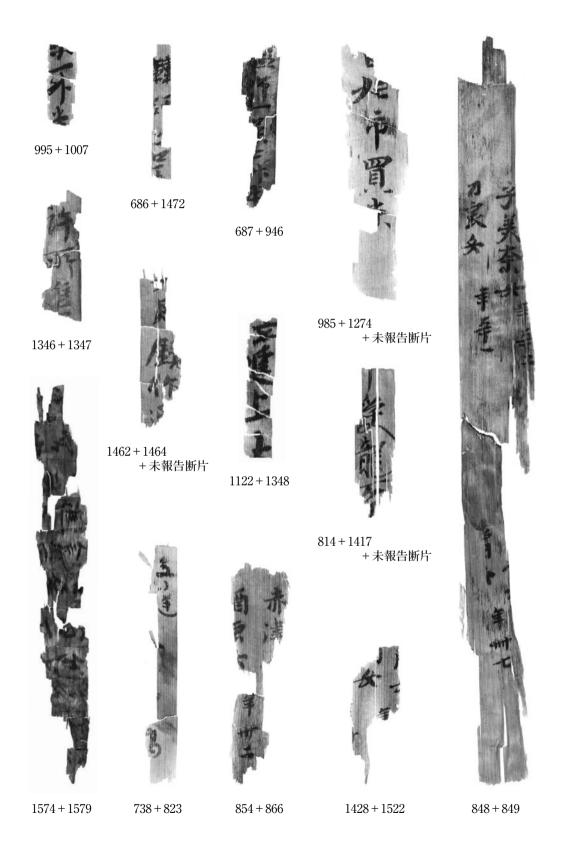


114



図版七





きことが判明したものを紹介する。木簡のうち主要なもの、および新たな調査によって釈文を補訂すべ十四)』(二○一五年一一月刊)以後に平城宮・京跡から出土したこの概報では、先に公刊した『平城宮発掘調査出土木簡概報(四

## 一、木簡の出土地点と状況

## 第五五一次調査(6ABQ区)

(二〇一五年七月~一〇月

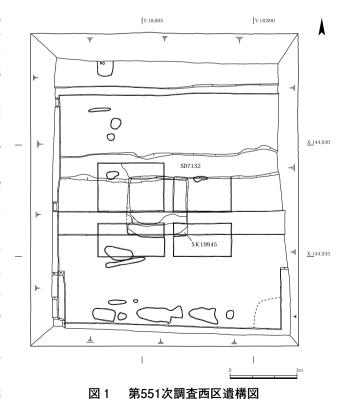
### 【釈文は14頁】

二八㎡である。 庭部に東西二つの調査区を設定し、調査を行った。調査面積は計三座部に東西二つの調査区を設定し、調査を行った。調査面積は計三平城宮第一次大極殿院の復原に伴う発掘調査。第一次大極殿院内

方形土坑SK一九九四五や、 明を目的とする。 位置にあたり、 定した。 一三二などである。 六 m このうち西区は、 の地点を中心として、 第一次大極殿院内庭部東半で検出したSE七 SE七一四五と同様の遺構の存在の確認と性格の 主な検出遺構は、 次大極殿の基壇西 平安時代初頭とみられる東西溝SD七 東西一二m 奈良時代前半に位置づけられる × 南 |南隅より 北 兀 m 南 0) 四 調 兀 査 七 Ŧī. 一の対称 区を設 m 西 解

が出土した。いずれも下層の青色粘土層からの出土である。木簡は、方形土坑SK一九九四五から八三点(うち削屑八二点)

深さは約二m。壁面は直立し、埋土は大きく上・中・下の三層に分方形土坑SK一九九四五 平面形は約二・七m四方のほぼ正方形で



井戸と断定することはできない。SE七一四五とSK一九九四五は 持たず、 ど東西対称となる位置に存する。 九四五は、 えさし、 形状や埋土の様相 者とも短期間に一 かれる。 その明確な抜取痕跡もない。また、 檜皮などの木質遺物が比較的多く出土した。このSK 概して遺物は少ないが、 東側のSE七一四五と大極殿院の中軸線を挟んでちょう 気に埋め立てられたと推定される。 からは、 可能性は捨てきれないものの、 両者とも井戸枠などの構造部材を 下層の青色粘土層からは木簡や燃 埋土の様相からは、 以上のような 両者とも 一九 両

きわめて密接な関係にある一 時的な施設と考えられる。

### 第五五二・五六六・五七七・ 五七八次調查

玉

二条大路の規模や様相 門前における朱雀大路 に伴う発掘調査。 跡朱雀大路などの整備 朱雀

坪 平城京右京三条一 坪・ 八坪の実態 坊一

計四次にわたる調査を 解明などを目指 土交通省による史 1432 211次 576% 180次 566次西区 495次 市336次 486次 市343次 488次 552次北区 橿考 2015 橿寿研 2015年度

第552・566・577・578次調査区位

#### 第五五二 一次調査 (6 A G F区)

行

(二〇一五年一二月~二〇一六年三月)

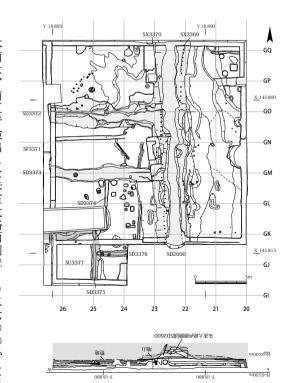
図 2

#### 釈文は14 15 頁】

二カ所の調査区を設定した。 通る三条条間北小路の実態を明らかにすることを目的として、 雀大路西側溝の規模、 調査地は、 右京三条一 ならびに右京三条一坊一坪・二坪やその間 坊 調査面積は計七九六㎡であ 坪にあたる。 朱雀門前における朱 南 北

に二分する坪内道路の北側溝、 査の結果、 北区では朱雀大路西側溝SD二六〇〇、 坪内道路と朱雀大路の交差点で朱雀 一坪を南 北

> とみられる雨落溝などを検出 長部分に加えて三条条間北小路の南 大路西側溝に架かる橋の橋脚などを、 した。 北両側溝 南区ではSD二六〇〇 二坪の築地塀 の 南延



第552次調査南区遺構図・土層図

(うち削屑一 木簡は、 南区で検出した朱雀大路西側溝SD二六○○から三六点 〇点) が出土した。

出土したが、 なお、北区でも同様にSD二六○○から木簡 釈読できない。 点 削 屑なし) が

出した。 段に掘り込まれ、 朱雀大路西側溝SD二六〇〇 幅三・二~四・〇m 上段には杭列が並ぶ場所がある。 深さ約 南 区では南北約二〇 • m を測 ŋ m にわたって検

図 3

### 第五六六次調査 (6 A G F 区)

(二〇一六年三月

七

月

雀大路西側溝と二条大路南側溝の規模、 調 查地 右京三条 坊 一・八坪にあたる。 ならびに西 一坊坊間東小路

第 578 次

朱雀門前における朱 釈文は16 17 茰

> 区を設定した。 の位置と規模を明らかにすることを目的として、 調査面積は計六八四㎡である。

> > 東西二カ所

の

調

しがら

み護岸、 調 查 の結果、 東区では朱雀大路西側溝SD二六〇〇とそのし

および二条大路南 側溝SD四〇〇六などを、 西 区 で は S D

第 566 次 <u>X-</u>145,700

などを検出した。

木簡は、東区では朱雀大路

西側溝

(うち

大路を横断する南北溝SD三四〇〇 四〇〇六の西延長部分に加えて二条

SK3411 23 22 009ZGS製刷豆器公果光 20

地山 |Y-18,880 |**55** 

X-145,670

X-145,680

PE

朱雀大路西側港SD2600

KC 61

KB-

IQ

Ю

IN

IM

IK

27

X-145,700

0

25

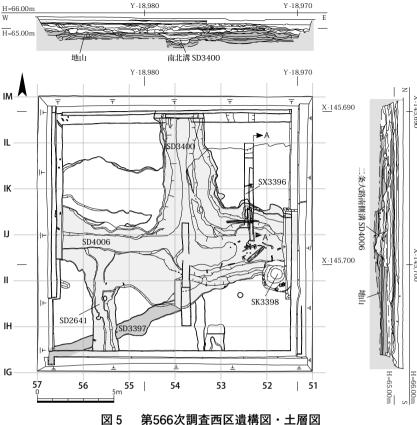
6ABY

図 4 第566次調査東区および第578次調査遺構図・土層図

削屑 四〇 〇点 SD四〇〇六から二点(うち削 SD二六〇〇Aから一三四点 朱雀大路西側溝SD二六〇〇 両区をあわせた出土点数は二一 点)、二条大路を横断する南北溝S D四○○六との合流部より南 (うち削屑 点 |四〇〇から三九点 〇六から四 の計一三七点が、 (削屑なし)、二条大路南側溝 の計八〇点が出土した。 一七mにわたり検出した。 一一点)、SD二六〇〇 七七点) 一点 である。 (うち削屑三五 西 区 で は S D (うち削屑三 七点 から 東区 東西 屑 ŝ

述の二条大路南側溝SD四〇〇六と

めた後に西寄りに新たに掘削したSD二六〇〇Bに分けら D二六○○Aは東肩の 合流部 0 北 側では、 み検出 開削当初のSD二六○○A、 西肩はSD二六〇〇B および の しそれ 掘 n 削 る。 時 を S 埋



第566次調査西区遺構図・土層図

四

五.

m

深さ約一・○mである。

形状 m ° 壊され 流部 約七mにわたり検出した。  $\bigcirc$ であった可能性が高 により差が大きい。 m で最大約八・ 東岸でしがらみ護岸を検出した。SD二六〇〇Bは、 から推測して、 深さ最大〇・ た可能性がある。 m, 七 m 。 およそ三・二~三・ 東岸で杭列を検出したが、 それより南では四・二~五 幅はSD二六〇〇Aの西岸の立ち上 検出面からの深さは約 SD四○○六の合流部及びその南側では 五. m 本来はしがらみ護岸 深さは最大約〇・ 五 m m , で、 幅約三・ 幅は合 が りの 場所 九

|条大路南側溝SD四〇〇六 述 の朱雀大路西側溝SD二六〇〇に接続する。 検出面での最大幅は約四・  $\stackrel{\bigcirc}{m}$ 東区では、 深さは約 約 0 m にわたり検 m 東流 出

○○との合流部より東で幅が広くなり、 兀 西 0 区では、 0 の西側で幅約三・五m、 約一 八mにわたり検出した。 深さ約○・ 深さも増す。 後述する南北溝SD 七 m 。 東側で幅四 規模は、 S D 四

と合流 可能性がある。 び 絶時ともに一体であったと考えられる。 7 潉 0 お 溝SD三四〇〇 ŋ する。 <u>√</u> = . 平城宮南面大垣周辺または宮内の排水機能を有していた 八 m、 埋土がSD四○○六と類似することから、 深さ約○・八m。 西区で、 約五・ 二条大路南側溝SD 五. この南北溝はさらに北に延 m K にわたり 検 機能時 出 四〇〇六 L た。 廃 幅

### Ξ 第五七七次調査 (6AGF区

(二〇一六年一二月~二〇一七年一月

#### 釈文は25 · 26 頁

側溝の規模や築地塀の  $m^{^{2}}$ である。 調 査地は、 右京三条一 様相 坊二坪にあたる。 の解明を目的とした。 同 1坪における朱雀大路西 調査面積は 

を検出した。 塀基底部SA三四三○など 三四二一・三四二二、 西両岸に打たれた杭列SX 側溝SD二六〇〇とその東 調 査の結果、 朱雀大路 築地

SD二六〇〇から二一点 (うち削屑八点) 木簡は、 朱雀大路西側溝 が出土し

### 朱雀大路西側溝SD二六〇

た。

m 検出した。 0 を測る。 m 南北約六mにわたって 深さ一・〇~ 幅三・一〜三

25

26

Y-18,895

Z68,81-Y

X-145,850

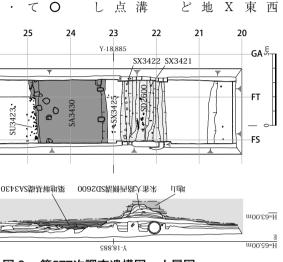


図6 第577次調査遺構図・土層図

### 四 第五七八次調査 (6 A G F · 6 A B Y 区)

(二〇一六年一一月~二〇一七年一

月

### |釈文は26頁|

四〇 の様 られたしがらみ護岸SX三四四三や三カ所の張り出し遺構SX三 調査の結果、 の構造物の有無の確認を目的とした。調査面積は三二四㎡である。 調 相、 〜三四四二などを検出した 查 地 は、 および二条大路を横断する朱雀大路西側溝に架かる橋など 朱雀大路西側溝SD二六〇〇、 朱雀大路と二条大路の交差点の西端にあたる。交差点 (遺構図は3頁掲載)。 およびその東岸に設け 兀

屑)、 木簡 の計三〇点 Bから二○点(うち削屑一七点)、Aまたは は、 朱雀大路西側溝SD二六〇〇Aから九点 (うち削屑二七点) が出土した。 В から (1) ず 点 れ b 削 削

七 m 深さは約○ SD二六〇〇Aは、 を埋めた後に西寄りに新たに掘削したSD二六〇〇Bに分けられる。 朱雀大路西側溝SD二六〇〇 を測る。 九 m SD二六〇〇Bは、 東肩のみ検出 開削当初のSD二六○○Aと、それ 幅は推定三・二~三・五 幅約三· O m 深さ約○ m

### 第五七一次調査(6AFF区)

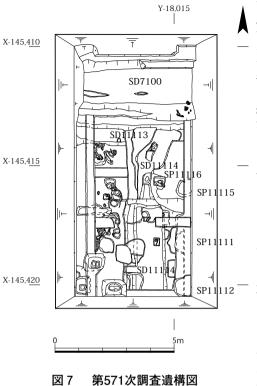
(二〇一六年五月 (~六月)

### 【釈文は18~21頁】

北隅 にあたる。 共同 1.付近、 住 宅建設に伴う発掘調査。 調査面 阿弥陀浄土院南辺と二条条間路を挟んで向かい合う位置 積 は 八四 ㎡である。 調査地は左京二条二坊十一坪の西

たる。 れる。 た。 ĺλ 査 東西 ず  $\overline{O}$ 結果、 れも奈良時 溝 は 東西 新 代 溝二 旧 0 遺構とみら 時 期 **か**の二 南 北溝二条、 条条間路 られ、 上 南側 |層遺構と下 柱 一穴一○基などを 溝 S D 七 層 遺 退構に分: 0 検 出 か

削 土分につ 柱穴SP一一一一二(抜取) 〇〇点)、 内訳は、二条条間路南側溝SD 木簡 屑二〇七点)、 (削屑なし) 九三点) は、 いては、 柱穴SP一一一一一 計 四七七点 に細分され、 上 となる。 下層のSD七一〇〇Aからの出土二三六点 層のSD七一〇〇Bからの出土二二二点 (うち また、 から一 他に 削 七 屑 二条条間路南側溝SD Ä 抜 四 一〇〇から四六七点 点 取  $\bigcirc$ В 辺 いず (削屑なし)、 点 から八点 が h か不明 出土した。 (うち削 出土遺 なもの (うち 七 遺 屑 が九 〇 〇 出 構不明 削 構 (うち (うち 四 屑 别 点 四 0



削屑なし)ある。

深さ○ できてい 二条条間路 0 深さ〇  $\bigcirc$ Aより 四 ない。  $\frac{1}{2}$ · 九m以上、 南側溝SD七一〇〇 Ó 南 六 m 五. 肩 この位置に m を測 南にある。 上層のSD七 る。 は、 上 V 下層 ず 層のSD七一〇〇Bの方がSD七 'n も北 一〇〇Bは幅 の S D 七 一 肩 は調査区外となり 〇〇Aは幅三 八 m 以 上 検 m 出 以

深さ約○  $\bigcirc$ 立柱の柱穴。 柱穴SP ) 六 m · 八 S P m 規模は、 同じ建物の柱穴の可能性もある。 S 一二が南 S P — E北約〇 が 九 r V 南北約〇 ず m っれも上 東 一  $\bigcirc$ 層で検出 九 m 七 m 以上、 深さ約 た掘

### 第五七五次調査(6BFK区)

(二〇一六年八月)

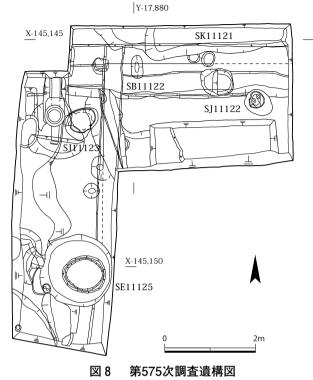
|釈文は22頁|

てい 個 る。 や南 人住 調 東にあたり、 宅建設に伴う発掘調査。 査面 積は 法華寺東 であ 面 調査地 口 廊 の外側に位置すると想定され は、 法華寺旧境内の中心か

を検出した。 産とみられ 調 查 0) 結 果 る埋 甕遺 几 ( 構に加えて、 六世紀に廃絶したとみられる土坑 磚組の井戸SE 一一一二五など や近 世 0

土した。 木 ·簡 は、 磚 組 井 戸 S E 一二五から、 計 七点 削 屑 なし) が 出

磚組井戸SE一一一二五 組 井戸。 検出 面 から の深さは 東西 約 約 九 Ŧī. 九 cm m 南 北約八 掘 方は  $\bigcirc$ 西 cm 約  $\mathcal{O}$ 楕 円 六 形 m 0



CH-

CG

CF

CE-

CĐ-

CC-

CA |

自然流路NR19964

# Y-18,710

図 9 第576次調査遺構図・土層図

#### 第五七六次調査 6 A B L 区

### (二〇一六年一〇月 (

月

|釈文は22~25頁|

第五六六次調査において検出した二条大路を横断する南北溝SD三 での 00について、 は二条大路 土交通省による史跡朱雀大路などの整備 有無を確認 の東 朱雀 į 坊域、 計画的 大路を挟んで東西対称の位置にあたる東 左京三条一 に配置され 坊 た溝 • 八坪 であるか検証すること に伴う発掘調査。 の北方にあたる。 調査 一坊

地

玉

を目的とした。 調査面 積は二三○㎡である。

域

認されなかった。 出 K した。 流 調 れる時期不明の自然流路NR一 査 結果、 SD三四〇〇に対応する、 二条大路北側溝SD 二条大路を横断する南 九九六二~ 一二五〇、 および 九九六六などを 北西 E 北溝は ロから 南 確 東

大路北側溝SD一二五〇からの出土である。 木簡 は、 五六三点(うち削屑五二一 点 が 出土した。 すべて二条

二条大路北側溝SD一二五〇 央大溝SD三七 深さ約 \_ 五mを測る。 五との合流部が近いためと考えられる。 西側が膨らむのは、 幅六・ 0 (東側) 宮内 ť から 五. 流 襾 n 出 側 る

### 第五九三次調査 (6ALQ区

(二〇一七年一〇月~二〇一八年一 月

### [釈文は27頁]

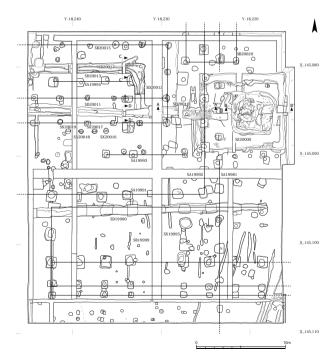
九六九 区全体 れる中枢部から西北辺にかけての やや西北寄りに位置する。 特別史 0  $m^{\!\!\!\!2}$ 空間利用の る跡平城宮跡の学術調査。 (うち新規調査面積八八二 変遷を解明することを目的とした。 東院地 調 遺構の様相を明らかにし、 X  $\underbrace{m}_{2}^{2}$ 査地は平城宮東院地区の中 0) 单 である。 枢建物群が存したと推 調 査 面 東 定さ 枢部 院 積 地

Ŧī. 派生する溝SD二〇〇一〇~二〇〇一三や掘立 二〇〇〇〇を検出した。 溝などを数多く検出した。 査の結果、 体的かつ 計画的に配置されている。 奈良時代前半から末期にかけての掘立 SE二〇〇〇〇の周囲には石組 また、 調査区東北部では大型の このような遺構の |柱建物SB二〇〇| 柱 溝が付属 建 井 物 万 万 S E 状況に P

> 加え、 東院中枢部における食膳を準備する厨に関連する空間であったと考 えられるようになった。 土器が出土していることなどから、 SD二〇〇一一~二〇〇一三から調理具や貯蔵具を含む多量 調査区周辺は奈良時代後半の

0)

した。 木簡は、 井戸SE二〇〇〇〇から計六点 (うち削屑 点 が 出 土



第593次調査遺構図 図10

Y-18,220 Y-18,225 X-145,080 SD20005 φ A CON D SP19985 SD20001 SD20010 SE20000 X-145,090 11

X二○○○七が構築されており、

掘方外周

0 空間 六 m

いから  $\mathcal{O}$ 平

権成される。 面方形の

また、

東側にはステッ 兀 間周に石

プ状の段S 配する 井 戸

東から井戸枠に接近する構造であ

)井戸

、枠掘方と、

江組溝を

わ

井

戸

、枠は完全に

れている。

抜取穴

掘方中央西寄りで

一辺約四

井戸SE二〇〇〇〇

奈良時代後半に属するとみられる大型の

図11 井戸SE20000遺構図

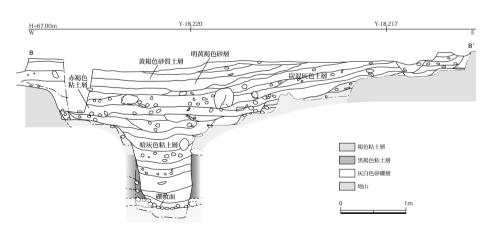


図12 井戸SE20000断面図

ずれも、 れる。 であったと位置づ を効率的に利用する SE二〇〇〇〇の水 などの関連施設は、 建物SB二〇〇 ための井戸と考えら 清浄な水を確保する 東院中枢部にお 灰色粘土層から出 抜取穴埋土のうち を呈する。 検 SE!|0000は 出 場に類する施設 五 m さ また、 m れ、 この井戸 の不整円形 木簡 掘立柱 南 東 北 ば 西 Ŧī. 暗 枠 約 約 13

### (6BFK区

(二〇一八年七月 九 月

### 法華寺旧境内にあたる。 、同住宅建設に伴う発掘調査。 当該地における遺構のあり方や、 調査地は平城京左京二条二坊十五 [釈文は27頁]

坪、

SK11254 SD1127 SD11269 SD11253 SD11261 X-145,365 SE11260 ₹ D′**4** 7/06/ SK11275 X-145.370 X-145,375 Y-17.875 | Y-17.870 Y-17.865 Y-17.860 Y-17.855 V-17 880

図13 第601次調査遺構図

当初 から中 七 二 ㎡ たため、 は 分拡張し、 面 最終的 積四 近世にかけての土地利用の様相の解明などを目的とした。 \_\_ \_\_ m² な調査 また調査区北方にも別に四二㎡ のL字型の調査区を設定したが 面積は計五二六㎡となった。 0 北調査区を設け 調査区北西を

S D の土坑など、 二五○などを検出した。加えて、 括廃棄土坑と考えられる土坑SK一一二四〇や、 調 一一二七○やその底面に掘り込まれた土坑SK一一二七三ほ 八角形に面取りされた柱根 査の結果、 中 奈良時代の遺構としては何らかの造営工 近世の遺構を多く検出した。 調査区の大部分を占める濠状遺構 基が遺存する掘立柱建物SB 総柱建物とみら 一事に関 わる

華寺集落の環濠に関連する遺構である可能性も考えられる。 多くみられ、 い区画が描 法華寺蔵 江戸時代中期から後期頃の様子を描いたとみられる法華寺村絵図 かれる。これらを勘案すると、 本調査区のすぐ南側には を参照すると、 村内の田畑には 「大堀」と記された東西に長 SD一一二七〇は中 「垣内」という地 名が 世

一二七三から、 木簡は、 濠状遺構SD一一二七○の底面に掘り込まれた土坑SK 一点が出土した。

込まれ、 していたと考えられ 北東方向から南西方向 濠状遺構SD−−二七○・土坑SK−−二七三 0) 埋 め立て土にあたる。 第一 坑間には堤状 段階は底面にSK一一二七三など複数の土坑が掘り る。 への流れを本流とし、周辺は浅い湿地状を呈 断 岬状の部分が残される。 面観察の結果、 第三 一段階 には幅約三・ 大きく三段階の変遷が S D 第二段階は第 八 - 1 二七〇 m 深さ約 確 は

○・三mの浅い溝となる。第一段階の埋土からは近世陶器上師器皿や羽釜、木製遺物などが、第三段階の埋土からは近世陶器

(第六〇一次)を参照されたい。五七五~五七八次)、『同二〇一八』(第五九三次)、『同二〇一九』一六』(第五五一次)、『同二〇一七』(第五五二・五六六・五七一・山上の発掘調査の詳細については、『奈良文化財研究所紀要二〇

簡一点(削屑)が出土したが、釈読できない。した第五六五次調査(二〇一六年)で西一坊大路黒色土盛土から木なお、平城京右京一条二坊四坪・西一坊大路・一条南大路で実施

### 一、凡例

 $\equiv$ 釈文の漢字は、 木簡は、 本書は、 ち釈文などに補訂が生じたものを報告対象とする。新出木簡 よび既刊の『平城京木簡一―長屋王家木簡一―』掲載分のう 七・五七八・五九三・六〇一次の各調査で出土した木簡、お 五五一・五五二・五六六・五七一・五七五・五七六・五七 を原則とし、新出木簡には便宜的に通し番号を付した。 木簡の出土地点と状況」では一括して取り扱った(2~5頁)。 二条大路を対象とした一連の調査であるため、前出の「一、 六・五七七・五七八次調査は平城京朱雀門周辺・朱雀大路 の釈文は、 **|實」「證」「嶋」などについては右の字体を使用した。** 内容により、文書、 奈良文化財研究所都城発掘調査部 調査次数順に掲載した。ただし、第五五二・五六 概ね現行常用字体に改めたが、「龍」「 付札、その他の順に排列するの (平城地区) の第

木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。

木簡の上端もしくは下端に、孔が穿たれていることを

同一木簡と推定されるが直接接続せず、

中間の一

字以

:: 木目と直交する方向の刻線が施されていることを示す。

いるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われ	型式番号は次の通りで、四桁の数字を用いているが、本概報
6049型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にして	(六)釈文下の中段に、現在の遺存の形態を示す型式番号を記した。
右に切り込みを入れたもの。	よる。削屑については、法量の表記を省略した。
6043型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にし左	を括弧付きで示した。なお、長さ・幅は木簡の文字の方向に
たもの。	す (単位は㎜)。欠損・二次的整形の場合、現存部分の法量
6041型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作っ	(五)釈文下の上段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さを示
6031・6032・6033・6043型式のいずれかと推定される。	マ、  文字に疑問はないが、意味が通じ難いもの。
折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は	カ編者が加えた註で、疑問が残るもの。
6039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は	( ) 右以外の校訂註、および説明註。
らせたもの。	含むもの。
6033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖	〔 〕 校訂に関する註のうち、本文に置き換わるべき文字を
6032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの。	一 合点。
頭・圭頭など種々の作り方がある。	「 」 異筆、追筆。
6031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの。方	所の左傍に・を付し、原字を上の要領で右傍に示す。
6022型式 小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの。	〔× 〕 文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇
6021型式 小型矩形のもの。	付した。
6051型式のいずれかと推定される。	々 、 抹消部分の字画が明らかな場合に限り、原字の左傍に
の失われたもの。原形は6011・6015・6032・6041・	■   抹消により判読が困難なもの。
6019型式 一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって、原形	の記号は省略した。
6015型式 長方形の材の側面に孔を穿ったもの。	きるもの。但し、削屑については煩雑になるので、こ
6011型式 長方形の材のもの。	□ □ 記載内容から、上または下に一字以上の文字を推定で
は、木簡を木目方向に置いた時の上下両端をいう。	□ 欠損文字のうち字数が数えられないもの。
では時代を示す千の位を省き、下三桁で表した。なお、端と	□□□ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

たもの。 原形は6041・6043型式のいずれかと推定され

る。

6051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

6059壁式 長方形 の材の一端を尖らせているが、 他端は折損 腐

蝕などによって原形の失われたもの。 原形は6033・

した。

6051型式のいずれかと推定される。

6061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。 品名を註記した。

内に製

用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

折損・ 割截・腐蝕その他によって、 原形の判明しない

もの。

6091型式 削屑。

括弧内の番号は、二次的整形の場合に推定できる原形の型式番

号を表す。

(七) 釈文下の下段に出土地点を示す小地区名 数字)を記した。 Zは地区不明を示す。 複数の地区から出土 (アルファベ ット

した断片が接続した場合は、 地区名を+で併記した

掲げた木簡を示す。例えば、「\*2」は「図版二」に対応する。

八

釈文の出土地点の下に付した「\*」印は、

巻頭図版に写真を

には、 本書の作成は、 渡辺晃宏 山本崇 (現副所長)・吉川聡 桑田訓也 都城発掘調査部史料研究室が行った。 (文化遺産部歴史研究室長): 木簡の釈読

山本祥隆があたり、

藤間温子・

畑野吉

馬場基

ゆりあ 淳子各氏の協力を得た。写真は企画調整部写真室の中村 は、 則が補助 安居院京子·北野智子·小池綾子·杉本敬子·田中美香· ĺ 鎌倉綾の撮影による。なお、 有田洋子・吉岡直人両氏の協力を得た。 本書の編集は山本祥隆が担当 編集に際して 郎郎 飯田 寺尾

<b>第五五一次調査</b>	「木簡の出土地点と状況」は1頁】 6ABQ	第五五二次調査	【「木簡の出土地点と状況」は2頁】 6AGF	
方形土坑のK一九九四五		朱雀大路西側溝SD二六〇〇	00	
	(29) · (15) · 1 081 HK53 *1	5・進上蒭□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□		
2 □□□生部乙万呂	091 HK53 <b>*</b> 1	・七月月	$ (176) \cdot 25 \cdot 2  019  GP22  *2 $	
3 右件組鍬	091 HK53 *1	<ul><li>6・乃御井郡 崩</li></ul>	(185) · (22) · 4 081 G022 *2	
4 □ 月 □ 土	091 НК53	7・□□□□ 刀支都□		
		•	$(106) \cdot (15) \cdot 5  081  6022  *1$	

· 桑□□ □	12 • □大□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	11 氷高命婦□	·□□里□ 豊田 五斗 八升	10・備前国邑久郡□□□	・□栗六斗 □				8・□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
(144) · (13) · 3 081 GK22		(95)·18·4 019 GK22 *1	153·24·6 032 GP22 *1		122·23·6 033 GN22 *1		$(65) \cdot (14) \cdot 3  081  G022$		
					15 □ 句 □ カ	14 部粳万呂			13 • □大□千足
					091 GN22	(57)·19·5 059 GP22		$(44) \cdot 14 \cdot 3  019  6022  *2$	

【「木簡の出土地点と状況」は3~4頁】

31 □ [短 カ]	30 枚 □	29 □□□□ □ 月ヵ〕	28 □ [手 里 ]	朱雀大路西側溝のロニ六〇〇A	27 □ [曹カ]	26 □ 可
(30) • 12 • 1 019	(62) • 15 • 4 039	$(134) \cdot (7) \cdot 2  081$	(58) • 28 • 3 081	Ŏ A	091	091
I.122	IJ22	IJ22	IJ22		1152	I 152
					33 十八 十 □	32 大□
					091 IJ22	$(28) \cdot (11) \cdot 2  081  II$
					[22	IL22

【「木簡の出土地点と状況」は5~6頁】

※35~37の三点は同一簡の可能性が高い	37 [留力] [留力]	36 □原里□□□	35 上総国阿嶓	· 馬 34·麻生津里物部毛人白米伍斗	二条条間路南側溝SD七一〇〇A
の可能性が高い	(60) • (15) • 1 081	(38) • 13 • 1 081	$(59) \cdot (12) \cdot 1$	世斗 197·16·4	Ŏ A
		081	081	051	
	EH87	EH87	EH87	EH87	
	* 12	<b>*</b> 22	<b>*</b> 22	<b>*</b>	
43 □殿二人	42・□中大夫□ 〔陋ヵ〕 ・□陋□	41 □ 三 斗	40	39 □直銭九百六文 □直銭九百六文	38・ 小治田部 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
091 EH87 *3	(77)·17·1 081 EH87 *3	(59)⋅(19)⋅1 081 EH87	(88) · (15) · 4 081 EH87	(101) · (15) · 4 081 EH87	(85)·(11)·2 081 EH87

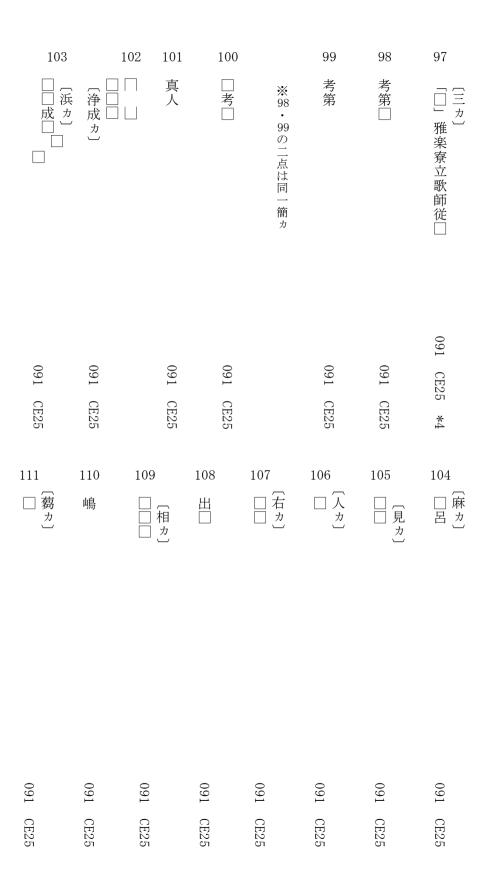
50	49	48	47	46	45	44
一斗八合六			□位□□(下ヵ)	□太伊美□〔吉ヵ〕	人	
091 ЕН87	091 EH87	091 EH87	091 EH87	091 EH87 *3	091 EH87	091 EH87
57	56 □天	55 [中中力]	54 □右□	53 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	52	51 人 □□ ###
091	091	091	091	091	091	091
EH87	EH87	EH87	EH87	EH87	EH87	EH87

62 • □ □ 69 69 官	61 □田□荒腊 (59)·15·2 081 EH87 *2 88 □主□	・高□□ (97)·30·3 039 EH87 *3 67 □資人□ [朝ヵ]	・「□ □□□ □ (99)·(13)·3 081 EH87 66 大伴部□ 091	59・ 「□ □」 二人大」薪□ 65 日置安 091	58 解 申 (56)·22·3 065(081) EH87 *2 [月ヵ] 091	<b>一条条間路南側溝SD七一〇〇B</b> 63 □□□ (45)・(7)・(2)
091 EH87 091 EH87	091 EH87	091 EH87	091 EH87	091 ЕН87	091 EH87	(45) · (7) · (2) 081 EH87

75 □ 石 □ カ	二条条間路南側溝SD七一〇〇	74 □ [麻ヵ]	73 □ 麻 □ カ	72 □ 五 □ カ	71 □ 五 ヵ
(30)·(12)·(1) 081 EH87					
081		091	091	091	091
EH87		EH87	EH87	EH87	EH87
				· 76 · □御□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	柱穴SP一一一一一(抜取)
				(127)·22·5 019 EF86 *3	
				ü	

	79 ぬ 93・(29)・4 081 I042 83 □□□□□□□□□□ (116)・(3)・6 081	170.35.8 011 1042 *7	↑川	77 □□寺平若□□□ 248・(31)・6 081 I042 *7 81 摂津□ … □□□ … □ (木口) (木口) [職ヵ] [考文ヵ]	井戸のE一一一二五	【「木簡の出土地点と状況」は6~7頁】	第五七五次調査 6BFK 第五七六次調査
_	(3) • 6 08	22) · 1 08		木 <sub>口</sub> )		と状況」:	
	81 CE25	81 CE25		) CD25		は7~。	6
	57 * 4	5 * 4		5 * 4		頁】	6 A B L

89 □ 呂 ヵ		88 · □ 八人 □	87 七位 下□	86 足則八十二□	(河) ( ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) (	85 • □有 有□□馬馬 [ 有ヵ]
$(15) \cdot (7) \cdot 1  081  CE25$	(113) · (21) · 3 081 CE25		$(77) \cdot (8) \cdot 4  081  CE25$	$(82) \cdot (8) \cdot 2  081  CE25$	(他、墨画ナド多数アリ)	
96	95	94	93	92	91	90
□国□楽郡人〔相ヵ〕	□磨郡菅生郷[飾ヵ]	蔵国入間郡	去中上	従七位下	従六位上谷人□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	□□□□□□□□□河内国茨田郡人
091	091	091	091	091		091
CE25	CE25	CE25	CE25	CE25	091 C	〔近衛ヵ〕 CE25 *
* 4	* 4	*	* 4	<b>*</b>	CE25	* 1



$(60) \cdot (8) \cdot 7  081  FS22$					
	116 ・ 「大魚ヵ」				
(157+87)·17·5 031 FR22+FS22 *5					
養老三年十月 …	・養物				
□郡□□郷美□…堅魚十一連一節[卓陽ヵ]	115 • 駿河国益□				
223·(20)·5 081 FT22 *5					
神亀三年十一月一日□□□□○	•				
〔坊令ヵ〕□□□□坊高田首稲足戸口真津人。2〕 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	114 • □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	CE25	091		113 > <del> </del>
得SD二六〇〇	朱雀大路西側溝のD二六〇〇	CE25	091	(3	1
【「木簡の出土地点と状況」は5頁】					112

第五七七次調査

6AGF

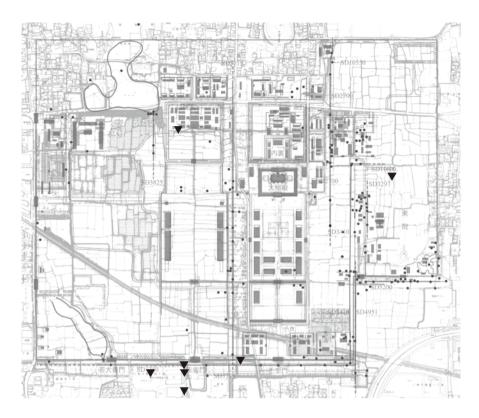
			119 依 羅	118   <del>   </del>		17・
			091 FS22	(21) · (78) · 7 081 FS22	(52) · (4) · 10 081 FS22	
123 □ 家	122 [富口口 カ]	121 • 返 抄 事	朱雀大路西側溝SD二六〇〇B	120 □ (寺 □ カ)	朱雀大路西側溝のD二六〇〇A	第五七八次調査
091 IM22 • 23	091 IM22 • 23	(79) • 46 • 3 081 1022 * 6		091 IN22		「木簡の出土地点と状況」は5頁】

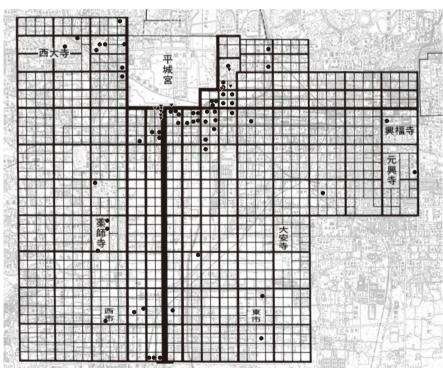
第五九三次調査	6ALQ	第六〇一次調査	6BFK
【「木簡	「木簡の出土地点と状況」は8~9頁】	<b>【</b> 「木	「木簡の出土地点と状況」は10~11頁】
井戸SE二〇〇〇〇抜取穴		土坑のK一一二七三(濠状遺構のD一一二七〇)	<b>水遺構SD一一二七〇)</b>
124 紀伊国安諦郡□□ [幡陀ヵ]	(94)·(16)·4 081 HS12 *6	128     四十枚之内	245·(125)·4 065 FC39 *7
125・□郷戸主物部入□			
・□字三年	(105)·26·3 081 HT12 *6		
126・□為定□美濃国□	(164) · (27) · 5 081 HT12 *6		
127	(167)·24·3 019 HT12		

# 『平城京木簡一―長屋王家木簡一―』訂正

1	□二口五 091 TB11 *8 刀良女 年五十一 曽女 年卌七 091 TB11 <b>四</b> 子美奈女 年五十二 □□ (女ヵ) <b>四二</b>	$(378) \cdot (30) \cdot 3$ 081 TB11	覆□藁藁霧徳税移移棚棚□「□□□」 □91 TB11	<b>八四十一四七</b> 十未報告断片
	091 TB11			

九九五十一00七			
□一升□	091 TB11 *8	□□□ (鏡ヵ)	091 TB11 *8
		一五七四十一五七九	
□進上□	091 TB11 *8		
<b>二四十二四七</b>	091 TB11 *8		[半 4]
□ 女 年 [女ヵ]			
[年ヵ]	091 TB11 *8		





平城宮跡(上)・平城京跡(下)木簡出土地点図 (◆木簡出土地 ▼本号掲載木簡出土地)

二〇二〇年三月三一日発行 二〇二〇年三月二六日印刷

平城宮発掘調査出土木簡概報(四十五)

奈良文化財研究所

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構

奈良市二条町二―九―一下六三〇―八五七七

 TEL
 〇七四二一三〇一六八三七

 FAX
 〇七四二一三〇一六八三七